



11月はロータリー財団月間です。

こう言いますと「ああ、寄付金集めの月間か」と早合点される方がおられるとすれば、とても残念なことです。また各クラブでも、財団月間が単なる寄付集金月間になってはいないでしょうか。

本年度の地区テーマ「ロータリークラブについてもう一度考えてみませんか」に沿って申し上げるなら、11月はロータリー財団について、もう一度考えていただく機会にさせていただきたいのです。それは何も「じゃあ考えなおして、寄付をやめるか」ということではありません。なぜロータリー財団が誕生したのか、財団がこれまでどういった活動を展開してきたのか、そして今、私たちは財団を活用して何ができるのか、など財団に関する様々なことに改めて思いを巡らせていただきたいのです。

そしてその前提として、ロータリー財団への理解を深めていただくことは申し上げるまでもありません。財団は私たちに対して、国際親善奨学金やGSE(研究グループ交換)など多様なプログラムを提供してくれます。これらを有効に取り入れていくことができれば、各クラブが大いに活性化するでしょう。また財団の各種補助金を効果的に利用していくことで、クラブ事業の幅が広がり、

一層の成果を上げることが可能になるでしょう。

「会員数の減少で、事業の範囲や規模が制限されている」というもっとうもらしい口実を先に立てるよりも、厳しい時代だからこそ財団を理解し、上手に活用することで奉仕を質量ともに確保していく方が、ロータリアンとしては賢明な選択なのではないでしょうか。

また11月5日を含む1週間をRIは「世界インターアクト週間」と定め、ロータリアンとインターアクターがともに国際的な活動に参加するように呼びかけています。当地区では現在、大阪桐蔭、大阪浪速、金光八尾、四天王寺、清風、相愛学園の6校でインターアクトクラブが活動を続けています。

インターアクトを巡っては先ごろ、RI理事会で年齢制限が14歳から12歳に引き下げられました。また奉仕の第5部門として「新世代奉仕」が設けられたことから、今後ロータリアンにとってインターアクトの重要性は、これまで以上に高まっていくことになるでしょう。

インターアクトクラブを提唱されているクラブはもちろん、されていないクラブもこのタイミングに、インターアクトについてもう一度考えてみられてはいかがでしょうか。